

ルカ福音書15章1節から17章19節の文学構造は、繰り返しの言葉やカギとなる文章によって、4つの段落に分けることができる。

1. 15:1-15:32
2. 16:1-16:13
3. 16:14-16:31
4. 17:1-17:19

## OpenAI o1

以下では、ルカ15:1～17:19の大きな流れを4つの段落に分ける根拠として、しばしば指摘される「繰り返しのキーワード」「冒頭・結語の文言」「登場人物への呼びかけの変化」などに注目しながら、それぞれの段落の構造を解説してみます。学術的かつわかりやすいトーンを心がけていますが、もう少し詳細なヘブライ語・ギリシャ語の原文のニュアンスが必要でしたら補足いたしますので、お知らせください。

### 段落1：15:1-15:32

#### 概要

- 有名な「失われた羊」「失われた銀貨」「放蕩息子」の3つのたとえ話を中心。
- 全体を通して「失われたものが見いだされる」「悔い改めによる喜び」が繰り返される。

#### 境界を示すキーフレーズ・文脈

1. 15:1-2：イエスが取税人や罪人たちと共にいることに対してファリサイ派がつぶやく描写
  - これが3つの「失われたもののたとえ」の導入となる。
2. 15:7, 15:10, 15:32：
  - 「悔い改める」(ギリシャ語でメタノイア *metanoia*)と「共に喜ぶ」(ギリシャ語でスンカイロ *synchairo* あるいはハイロ *chairo*)など、似た単語が繰り返される。
  - 失われたものが「見いだされた (*ευρέθη* *heurēthē*)」という言葉も共通。

3つのたとえ話をまとめると、冒頭(15:1-2)での「なぜ罪人と食事をするのか」という非難に対する答えとして、「失われた者を探し、見つかった時に大きな喜びがある」という神の愛が示されます。最後(15:32)で父親が「この息子は死んでいたのに生き返り、失われていたのに見つかったのだ」と語る締めくくりが、最初の2つのたとえ(羊・銀貨)とも共通の主題を持つ結語になっています。

### 段落2：16:1-16:13

## 概要

- 「不正な管理人(執事)のたとえ」と、それに続くお金・富に関する言葉が記される。
- 「あなたがたは神と富(マモン)に同時に仕えることはできない」という有名な一節(16:13)で締めくくられる。

## 境界を示すキーワード・文脈

1. 16:1：冒頭に「またイエスは弟子たちに言われた」という区切り。
  - 前の章(15章)での聞き手には「取税人、罪人、ファリサイ派」等が登場していましたが、ここでは「弟子たち」に話し始めることで、文脈が切り替わります。
2. 16:13：「あなたがたは神にも仕え、また富(マモン)にも仕えることはできない」という結論。
  - ここで一つの言い切りの形が与えられ、次の段落(16:14以降)で再びファリサイ派にスポットが当たります。

この段落は、金銭・富をどのように扱うかというイエスの教えをまとめており、「不正な管理人のたとえ」に対するイエスの注釈として「不正の富によって友を作りなさい」(16:9)と語られるあたりが特徴的です。直訳では「不義のマモン (*mamōn tēs adikias*)」という強い表現が用いられ、ここが神と対置される存在として鮮明に示されています。

---

## 段落3：16:14-16:31

### 概要

- 冒頭に「金銭を好むファリサイ派」が登場し、イエスの言葉をあざ笑う描写(16:14)。
- それに対するイエスの説明(16:15-18)と、「金持ちとラザロ」のたとえ(16:19-31)が続く。

### 境界を示すキーワード・文脈

1. 16:14：「ところが、金銭を好むファリサイ人たちは…」という新たな登場人物への焦点移動。
  - これまで(16:1-13)は「弟子たち」に教えていたのに対し、再びファリサイ派が聞き手として強調される。
2. 16:19～31：「金持ちとラザロ」のたとえ。
  - たとえ話のクライマックスは16:31「もしモーセと預言者たちに耳を傾けないなら、たとえ死者の中からよみがえっても…」という示唆的な言葉で終わる。
  - ここは「神に対して悔い改める態度を持たない者への警告」として、1つのまとまりになっている。

この段落では、「富と神」との関係、特に(16:14)に示される「富を好むファリサイ派」が受ける裁きの性格が強調されます。段落2の「神とマモンに同時に仕えることはできない」という結論をさらに発展させるように、ファリサイ派の姿勢を批判し「金持ちとラザロ」のたとえで締めくくる流れになっています。

---

## 段落4：17:1-17:19

## 概要

- 主に弟子たちに対する教え(躓き・赦し・信仰の大きさなど)がまとめられる(17:1-10)。
- 10人のらい病人の癒し(17:11-19)のエピソードが続き、最後はサマリア人が感謝を示す場面がクローズアップされる。

## 境界を示すキーフレーズ・文脈

1. 17:1：「イエスは弟子たちに言われた」
  - 16:19-31の「金持ちとラザロ」のたとえから一転、再び弟子たちに注意や戒めを語る流れに変わる。
2. 17:11：「イエスがエルサレムへ行かれる途中…」という地理的な状況説明で場面が少し変化。
  - 10人のらい病人が登場し、そのうち1人であるサマリア人が「神をほめたたえ」つつ戻ってくるというエピソードが描かれる。
3. 17:19：「立ち上がって行きなさい。あなたの信仰があなたを救ったのです。」
  - ここで一つの締め言葉が入り、17:20以降は「神の国」に関する別の話題へと移行していく(17:20～)。

この最後の段落(17:1-19)では、弟子たちへの倫理・信仰についての教え(赦しや謙遜など)と、らい病人の癒しによって示される「真の感謝」「信仰」が結びつけられています。特に17:19のイエスの言葉はしばしば「信仰による救い」がルカ福音書の中心テーマの1つであることを強調する箇所として取り上げられます。

---

## まとめと応用

- 繰り返しのキーワードや、話し手・聞き手の切り替わり（「イエスは弟子たちに言われた」「ファリサイ派があざ笑った」など）、「たとえ話の開始・終了フレーズ」が大きな段落の区切りになる。
- 15章全体は「失われたものを見つけ出す神の愛と喜び」、16章は「富と神への態度」に焦点が移り、17:1-10では「信仰と赦し」を扱いつつ、17:11-19で「らい病人の癒し」が強調されている。
- それぞれの段落は前後に関連しつつも、「聞き手」「主題の焦点」「たとえの結末」が異なるため、自然に4つのブロックとして読むことができる。

このように、ルカ15:1-17:19は大きく4つの流れに分けられ、各段落の連なりの中で「神の愛・悔い改め・信仰・富の扱い・真の感謝」といった主題が絡み合っています。段落構造を意識しながら読むと、イエスの教えとたとえ話がどのように展開・補足されているかがより明確に理解できるでしょう。

---

## ABAB ABBA

段落1と段落3は、パリサイ人向けで、

段落2と段落4は、弟子に向けて語られました。

### ABBA

段落1と段落4は、悔い改め（罪の赦しと病の癒し）、

段落2と段落3は、負債を赦す（世の富か神か）、

全体が主の祈りの「罪を赦したまえ、兄弟の負い目を赦しました」がテーマである。

## OpenAI o1

以下では、提示していただいた「ABAB」と「ABBA」という2種類の構造（視点の違いによる読み方）を整理しながら、全体が「主の祈り」の“罪を赦して下さい、私たちも負い目のある人を赦します”というテーマに繋がる、という点を解説します。ポイントは、「誰に向かって語られているか」（ABAB構造）と、「罪の赦し／負債の赦し」（ABBA構造）の両面から見ることです。

## 1. ABAB構造：語りかけの対象による区分

- **A：段落1（15:1-15:32）と段落3（16:14-16:31）**
  - ファリサイ人たち（特に富を好むファリサイ人）に向けて語られています。
  - **段落1**：取税人や罪人と共にいるイエスを批判するファリサイ人（15:1-2）が引き金となり、失われたものが見いだされる喜びを説く三つのたとえ。
  - **段落3**：「金銭を好むファリサイ人」（16:14）を正面から批判しつつ、「金持ちとラザロ」のたとえを通して悔い改める姿勢を強調。
- **B：段落2（16:1-16:13）と段落4（17:1-17:19）**
  - 弟子たちに向けて語られています。
  - **段落2**：「またイエスは弟子たちに言われた」（16:1）という書き出しから始まり、「不正な管理人のたとえ」や「神と富に仕えることは同時にできない」（16:13）という弟子への教え。
  - **段落4**：「イエスは弟子たちに言われた」（17:1）という形で、躓き・赦し・信仰などの弟子としての在り方に対する直接的な教え。そして10人のらい病人の癒し（17:11-19）が続く。

このように、**A（ファリサイ人）→B（弟子）→A（ファリサイ人）→B（弟子）**という“ABAB”の交互配置で、読者は「ファリサイ人へ」「弟子へ」と語りかける対象が繰り返し変わっていく構造を確認できます。

## 2. ABBA構造：内容・テーマによる区分

- **A：段落1（15:1-15:32）と段落4（17:1-17:19）**
  - いずれも「悔い改め」と「赦し（病の癒しを含む広い意味での救い）」が扱われる。
  - **段落1**：失われた羊・銀貨・息子が「見いだされる」という神の赦しと回復が主題。
  - **段落4**：弟子たちへの「赦しの教え」（17:3-4）と「らい病人の癒し」（17:11-19）の物語によって、“悔い改め”“信仰”に応じた「罪の赦し・癒し」が示される。
- **B：段落2（16:1-16:13）と段落3（16:14-16:31）**
  - いずれも「負債を赦す」あるいは「富をどう扱うか」という視点が強調される。
  - **段落2**：「不正な管理人」のたとえで「（借金を）いくらか減らしてあげる」行為や「神と富（マモン）のどちらを優先させるか」というテーマ。

- **段落3**：「金持ちとラザロ」のたとえを通して、富を正しく用いず悔い改めない者の結末を描き、“負債”や“恵み”をどう捉えるかを問う。

このように、**A（悔い改め・赦し）→B（富や負債の赦し）→B（富や負債の赦し）→A（悔い改め・赦し）**という“ABBA”の鏡像的な配置によって、ルカ15-17章前半は「赦し」の二面性を繰り返し語っていると見ることができるのです。

---

### 3. 主の祈りとの関連：「罪の赦し」「負債の赦し」

---

ルカの主の祈り（ルカ11:2-4）では、マタイ版(6:9-13)にある「私たちの負い目をお赦してください（*aphes hēmin ta opheilēmata hēmōn*）」に相当する部分が「私たちの罪をお赦してください（*aphes hēmin tas hamartias hēmōn*）。私たちが負い目のある人（*panti opheilonti hēmin*）を赦します」という文言になっています。つまり、「罪の赦し」と「負い目（=負債）の赦し」は、主の祈りの中でも並列的・象徴的に用いられているのです。

- **段落1 & 4：罪の赦し（悔い改め、癒し）**

- 失われた息子の帰還、罪人の悔い改めと回復の喜び（15章）、
- らい病人が清められ、信仰によって救われる（17章）。
- →「赦していただく（罪の赦し）」というテーマ。

- **段落2 & 3：負債・富の扱い（世の富か神か）**

- 不正な管理人の「負債（借金）を減らす」エピソード（16:5-7）、
- ファリサイ人を念頭に「金持ちとラザロ」のたとえで“富”と“悔い改め”を結びつけて語る（16章後半）。
- →「他者の負債を赦す」・「富の正しい捉え方」を通じて、“負債を赦す”というテーマに焦点。

ここに「主の祈り」の「罪を赦して下さい、私たちが負い目のある人を赦します」が根底に流れていると考え、**罪そのものの赦し**と、**（金銭的あるいは社会的）負債を赦す**という二つの視点が、互いを照らし合うように構成されていることが分かります。

---

### 4. まとめ

---

#### 1. ABAB構造

- ファリサイ人（A）→弟子（B）→ファリサイ人（A）→弟子（B）
- それぞれの受け手に応じて、イエスの教えが繰り返し展開される。

#### 2. ABBA構造

- 悔い改め・赦し（A）→負債の赦し・富の問題（B）→負債の赦し・富の問題（B）→悔い改め・赦し（A）
- 「罪の赦し」と「負債の赦し」という二面性が交差しつつ、主の祈りのテーマが全体を貫く。

こうして眺めると、ルカ15-17章前半は「**赦し**」を多面的に扱っていることが明確になります。「失われた者が見いだされる赦し」「信仰による病の癒し」、そして「不正な管理人のように負債を減らしてあげること」「富の扱いで示される他者への寛容」。これらはいずれも「主の祈り」の中心要素である「罪と負債の赦し（悔い改めと赦し合い）」へと繋がると見ることができるのです。

## ルカ11:4

「私たちの罪をお赦してください。私たちも、私たちに負い目のある人をみな赦しますから...」

この視点をもって15-17章を読むと、イエスが「悔い改めによる罪の赦し」と「具体的な（社会的・金銭的）負債や他者への赦し」を一体として教えておられることが、一層深く理解できるでしょう。

## ルカ福音書には、このたとえ話の実例がいくつか書かれています。

### 18:18-23 金持ち（マタイでは青年）の話

### 19:1-10 金持ちザアカイの悔い改め

## OpenAI o1

以下では、ルカ福音書15-17章に見られる「富と悔い改め」のテーマが、その後の18:18-23と19:1-10でどのように具体的に示されているかを概観します。これらの箇所は、先に見た「神と富のどちらを選ぶか」「悔い改めによって失われた者が救われる」というルカ独自の強調を、実例の形でさらに深く描いているといえます。

## 1. ルカ18:18-23 「金持ちの指導者（マタイ・マルコでは若者）」

### 箇所の流れ

- ある指導者がイエスに近づき、永遠の命を得るにはどうしたらよいかを尋ねる（18:18）。
  - ルカでは「ある指導者」（*archōn ápχwv*）とあり、社会的にも宗教的にも地位のある人物を示唆します。マタイやマルコにある「若者」（ネアニスコ *neaniskos*）という表現は、ルカでは用いられていません。
- イエスは律法（戒め）を守るようにと言った後、「あなたの持ち物をすべて売って貧しい人々に分け与えなさい」と命じる（18:22）。
  - ここでイエスは「財産を処分しなければならない」と極めてラディカルな要求をする一方、「そうすれば天に宝を積むことになる」とも語っています。
- その人は非常に多くの財産を持っていたので深く悲しむ（18:23）。
  - 結局、この人物は財産を手放せず、イエスの言葉について行けませんでした。
  - 18:24-25では「金持ちが神の国に入るのは難しい」という有名なイエスの言葉が続きます。

### 15-17章との関連

- ルカ16章の「不正な管理人」や「金持ちとラザロ」で繰り返し指摘されるテーマ、すなわち「富を正しく用いるかどうか」が再び現れています。

- 特にファリサイ派（16:14）に対する批判や、弟子に対する「富を神のために活用せよ」という教えが、この指導者の行動選択の中で具体化していると言えます。
- 15-17章では「悔い改める罪人は神の喜び」と描かれていますが、この指導者は富を捨てられずに悔い改めに至りません。ここでは“ネガティブな実例”として、富が神の国への大きな障害となりうることを示しています。

---

## 2. ルカ19:1-10 「取税人ザアカイの悔い改め」

---

### 箇所の流れ

1. イエスがエリコを通過されるとき、背の低いザアカイが木に登ってイエスを見ようとする（19:1-4）。
  - ザアカイは「取税人のかしら」（19:2）であり、当時はローマ帝国に税を納める仕事の責任者として、ユダヤ社会で嫌われる富裕層でもありました。
2. イエスはザアカイに声をかけ、「今日はあなたの家に泊まることにしている」と宣言（19:5）。
  - イエスは当時の社会的偏見を超え、取税人とも親しく接する姿勢を示します（ルカ15:1-2の取税人たちと同じく、周りの人々は「罪人のところへ行く」とつぶやく）。
3. ザアカイは「主よ、私は財産の半分を貧しい人々に施します。また、だまし取ったものは4倍にして返します」と告白（19:8）。
  - 旧約の律法（出エジプト記22:1など）の悔い改めの基準を上回る姿勢が見られます。
4. イエスは「今日、この家に救いが来た」と言い、「失われた者を探して救うために、人の子は来たのです」（19:9-10）と宣言。
  - 悔い改めによる赦しと回復がここで“成功例”として描かれます。

### 15-17章との関連

- 「金持ちの指導者」が富を捨てられず去っていった（ルカ18章）一方、ザアカイは実際に財産の大半を手放し、さらに不正のあった部分を償う宣言をしました。
- ルカ15章のたとえ話（失われた息子など）に出てくる「失われた者を探し出して救う」というイエスの姿勢が、ザアカイ物語で具体的に成就しています。
- 16章で語られた「富を正しく用いよ」という教え（不正な管理人、金持ちとラザロ）が、ここではポジティブに実行されている例です。
- 17章前半で強調される「赦し」「悔い改め」「信仰による救い」といった要素が、ザアカイの行動とイエスの宣言（19:9-10）により体現されています。

---

## 3. まとめ：対照的な「金持ち」二人と主題の総合

---

- 18章の指導者（ある金持ち）：
  - 戒めを守っていたが、最後まで財産を捨てられず帰ってしまい、悔い改め（方向転換）に失敗した。
  - イエスの言葉「金持ちが神の国に入るのは難しい」を象徴する人物。

- **19章のザアカイ：**

- 社会的には嫌われていた取税人だが、イエスに招かれるや即座に悔い改め、自発的に富を手放す決断をした。
- イエスから「失われた者を探して救うために来た」という福音そのものが宣言され、実際に救いを受ける人物。

ルカ福音書15-17章の「金持ちとラザロ」や「悔い改めによる救い」のメッセージは、このように18-19章に至ってさらなる具体的事例として示されます。すなわち、

1. **富を巡る選択が、**

- 神の国への歩み(ザアカイのように手放して悔い改める)と
- 神の国からの離脱(指導者のように富をあきらめられず離れていく)を分ける大きな境界線となりうること。

2. **“失われた者”が見出される喜び**は、罪人や取税人のような立場の人にこそ開かれ(15章やザアカイ)、表面上“正しい人”だと思われている者が富を捨てられず悔い改めに至らない場合もある(16章~18章のファリサイ人や指導者)。

こうした二つの事例(18章・19章)は、「悔い改めの具体的姿」と「富をどう扱うのか」というルカ福音書の主要テーマを締めくくる重要な場面として位置づけられるのです。特にザアカイの物語において、イエスの宣言(19:10「失われた者を探して救うために来た」)は、15章で示された“失われた羊・銀貨・息子”のたとえの主題と完全に共鳴しており、ルカ福音書独特の「罪人・弱者・失われた者への救い」という福音をまさに象徴する出来事となっています。

## ヤコブは、手紙の中で警告します。

---

### 4:1-10 世を愛する欲望を捨てよ

### 5:1-8 さばきの日に富は役に立たない

## OpenAI o1

---

以下では、ヤコブの手紙4:1-10と5:1-8について、主に「世を愛する欲望を捨てよ」「裁きの日に富は役に立たない」という観点から、簡潔に解説します。ルカ15-19章における「富と悔い改め」のテーマとの関連にも目を向けつつ、ヤコブ書がどのように“世への愛”や“富の危うさ”を警告しているかを見てみましょう。

---

## 1. ヤコブ4:1-10 「世を愛する欲望を捨てよ」

---

### 背景と流れ

1. **争い・争い事の源は何か?(4:1-3)**

- 「あなたがたの内部にある欲望から来る」と明言されます。ここでいう「欲望」は、“自分の思い通りにしたい”という自己中心的な心を指すと考えられます。

2. **世を愛することは神に敵対すること(4:4-5)**



- 「世と友になることは神に敵対すること」(4:4)。旧約の預言者たちが「偶像礼拝＝靈的な不貞(姦淫)」と例えた流れを踏まえ、世を神以上に愛することは“靈的な姦淫”である、と強い言葉で警告しています。

### 3. へりくだって神に近づく(4:6-10)

- 「神は高ぶる者を退け、へりくだる者に恵みをお授けになる」(4:6)。
- 「神に近づきなさい。そうすれば神はあなたがたに近づいてくださいます」(4:8)。
- 世に対して心を開くのではなく、神に心を明け渡し、へりくだって悔い改めることこそが、求められる姿勢だと語られます。

## ポイント

- ルカ福音書においても、富を優先して神に心を開かない者(ルカ16章の「金持ちとラザロ」、「金持ちの指導者」など)が警告の対象でした。
- ヤコブ4:1-10では、「世を優先する欲望(富や名声、権力などへの執着)」そのものを断ち切るよう勧めています。これが結果的に“悔い改め”の道となり、神との正しい関係に至るのだと強調しています。

---

## 2. ヤコブ5:1-8 「裁きの日には富は役に立たない」

---

### 箇所の流れ

#### 1. 富む者への激しい警告(5:1-3)

- 「富んでいるあなたがた、聞きなさい。悲しみ泣き叫びなさい。あなたがたの富みは朽ち...金銀もさびてしまった」(5:1-3)。
- “最後の日”には富の実体は何の役にも立たないどころか、その「さび」が彼らを訴える証拠となる、と強い表現で告げられます。

#### 2. 不正な富の蓄えと弱者への虐げ(5:4-6)

- 働き人の賃金を不当に払わないなど、弱者を踏みつける富のあり方を告発しています。
- 「贅沢と快楽を尽くして、自分の心を肥え太らせている」(5:5)という生き方は、神の裁きの目から逃れられない。

#### 3. 主の来臨に備えた忍耐(5:7-8)

- 「主の来臨を待ち望みなさい...農夫が貴重な実りを待つように...心を強くしなさい。主の来臨が近いのです」(5:7-8)。
- 富を頼みにするのではなく、主を待ち望む忍耐が肝要であると説いています。

## ポイント

- ルカ16章の「金持ちとラザロ」は、裕福な人間が地上での豊かさに溺れ、弱者ラザロを顧みなかった結果、死後の苦しみを受ける姿が描かれます。

- ヤコブ5:1-8のメッセージも同様に、富があること自体よりも、“富を用いて他者を踏みにじる生き方”を鋭く糾弾しています。最終的な裁きの観点（終末論的視点）を見れば、金銀は「証拠」として逆に自分を責める存在になりうるというわけです。

---

## 3. 「世を捨てよ」と「富は役に立たない」のメッセージ

---

### 3.1 ルカ15-17章との類似点

- ルカ15-17章では、「富を神に仕える道具として用いらず、神よりも上に置いてしまう」ことがいかに危険かが示されていました。
- 「ABBA構造」や「ABAB構造」の観点から見れば、ファリサイ人など地位ある人々が悔い改めに至らず、弱者や罪人が悔い改めて救われる構図が明白です。
- ここにヤコブの警告を重ねると、“世を愛する”とは具体的に「富や地位・欲望に振り回される生き方」であり、神よりも自分の欲を優先することだという点が一致します。

### 3.2 「悔い改め」の軸

- ヤコブ4:7-10の「神に近づき、へりくだり、悪魔を退ける」という呼びかけは、ルカ17章や19章（ザアカイの悔い改め）に見る「罪や誤った優先順位からの方向転換」と共鳴します。
- ルカ19:8-9で、ザアカイが富を返済・分与すると即座に「今日この家に救いが来た」と宣言されるのは、ヤコブの「世から離れて神に近づく」決断を実行に移した姿の好例とも言えます。

---

## 4. まとめ

---

### 1. ヤコブ4:1-10 「世を愛する欲望を捨てよ」

- 内側の争い・欲望から生じる罪を悔い改めるよう強く促し、世と友になることを「神への敵対」と呼ぶほどの厳しい姿勢で警告しています。

### 2. ヤコブ5:1-8 「裁きの日に富は役に立たない」

- 富を蓄え、人を犠牲にしてまで贅沢をむさぼる生き方はやがて神の裁きを受ける。終末的視点から、金銀は朽ちるし、むしろそれが証拠となって持ち主を責めると告げています。

### 3. ルカ福音書（特に15-17章、18-19章）との関連

- ルカが繰り返し描く「富・地位を頼みにする者」と「失われた者が悔い改めて救われる」対比と、ヤコブの「世を愛するな」「富が裁きの根拠になる」という警告には多くの共通点があります。
- 特に“悔い改め”の重要性と、“富・欲望にしばられたままでは神の前に立てない”という福音の根源的なテーマが強調されています。

最終的にヤコブ書が告げるのは、「世の富や欲望に頼る生き方ではなく、へりくだって神に近づく生き方」こそが、信仰者としての真の歩みである、ということです。これはルカ福音書における「富と悔い改め」の主題とも響き合い、旧約から新約にわたる一貫したメッセージとして展開されていると言えます。

---

## パウロもテモテに信仰の戦いについて教えます。

---

## 1テモテ6:6-11、6:17-19

## 2テモテ 3:1-9

# OpenAI o1

---

以下では、パウロがテモテに宛てた手紙（1テモテ・2テモテ）における「富に対する態度」と「信仰の戦い」についてまとめます。ルカ福音書やヤコブ書と同様、“世の富に執着すること”や“自己中心的な欲望”を強く警戒し、主に信頼して歩むよう勧めている点が見えてきます。

---

## 1. 1テモテ6:6-11、6:17-19

---

### 1-1. 6:6-11 「金銭欲を退け、信仰の戦いをせよ」

#### 1. 敬虔と満足があれば十分(6:6-8)

- 「私たちは何も持たずに世に生まれ、何も持たずに世を去ります。(6:7)」
- 食べ物と着る物があれば、そこで満足すべきだという姿勢が示される。

#### 2. 金銭欲の危険(6:9-10)

- 「金銭を愛することがあらゆる悪の根だ。(6:10)」
- 富に心を奪われると、人は多くの誘惑と罠に陥り、信仰から迷い出る危険がある。

#### 3. 信仰の戦いに励む(6:11)

- これらの欲望から逃れ、「義」「信仰」「愛」「忍耐」などを追い求めるように勧める。
- 「神の人よ...逃げなさい...正義・敬虔・信仰・愛・忍耐・柔和を追い求めなさい。(6:11)」

### 1-2. 6:17-19 「今の世で富んでいる人々への勧め」

#### 1. 不確かな富に望みを置くな(6:17)

- 「この世で富んでいる者に、思い上がらず、不確かな富に望みを置かず、むしろ神に望みを置くように命じなさい。」
- 富はいつ失われるかわからない「不確かなもの」であり、神こそがすべてを豊かに与えてくださるお方だと断言。

#### 2. 善を行い、惜しみなく分け与える(6:18-19)

- 「善を行う者、良い行いに富む者、惜しみなく施しをする者になりなさい。」(6:18)
- そうすることで「真のいのち」への確かな土台を築くことになる(6:19)。
- 富自体は悪ではないが、それを自分の欲のためだけに使うのではなく、他者のため・神の栄光のために用いるようにと勧められる。

## まとめ

- 「金銭を愛すること」は根本的な誘惑・悪の源となり得るため、そこから逃げるように強く警告。

- 富を持っている人は、それ自体を否定されるのではなく、**富を正しく（分かち合い・善行のために）用いる責任**がある。
- 終末的な視点で見ると、**神に望みを置く生き方**こそが「真のいのち（永遠の命）」につながる道だとパウロは教える。

---

## 2. 2テモテ3:1-9

### 2-1. 終わりの日の人間の姿

#### 1. 最後の時代に現れる性質(3:1-5)

- 「人々は...自分を愛し、金を愛し、大言壮語をし、高慢で...(3:2)」など、自己中心的で神を敬わない姿が列挙される。
- 「神を敬う態度を持っているようで、その実を否定している」(3:5)と批判。「こうした人々を避けなさい」と警告する。

#### 2. 真理に逆らう人々(3:6-9)

- 彼らは上辺だけ敬虔で、実際には自分の欲や利己心に支配されている。
- 「真理に対して抵抗する」(3:8)状態に陥っており、結局はその愚かさが明らかになる(3:9)。

### 2-2. 「金を愛すること」と終末的な墮落

- 3:2-4には、罪のリストの最初のほうに「金を愛する者」と挙げられ、最後のほうには「快樂を神よりも愛する者」とある。
- これは1テモテ6章と同じく、**自己の欲望や富への執着が、神への信仰を損なう根源になり得ることを示す。**

#### まとめ

- 「**金を愛すること**」は自己中心的な生き方の典型例として取り上げられる。
- パウロはテモテに、このような人々がさらに増える“終わりの日”にあって、**健全な信仰と真理への従順を保つよう**励ましている。
- 彼らは見せかけの「敬虔の形」はあるが、その力（実質）を否定する者たちであり、**心の内側が富や欲望に囚われている**ことを指摘する。

---

## 3. まとめと全体像

#### 1. 1テモテ6:6-11, 17-19

- 金銭欲がもたらす誘惑と危険性を強調し、富を正しく用いる責任を教える。
- 「信仰の戦い」において、**神へのへりくだり・隣人への施し・永遠の価値に目を向ける生き方**を勧める。

#### 2. 2テモテ3:1-9

- 終わりの時代に蔓延する自己中心と金銭愛を批判し、「**上辺だけの敬虔**」からの脱却を促す。

- 真理を拒む者たちの“見かけの神信仰”と、その背後にある富・欲望への依存を警戒する。

### 3. ルカ福音書やヤコブ書との関連

- ルカ15-17章、18-19章、ヤコブ4-5章などで見られる「富を優先する生き方」と「悔い改め」の対比を、パウロも同様に扱っている。
- “富への態度”と“神への信仰姿勢”は常に表裏一体であり、聖書全体を通して「悔い改め」「へりくだり」「分かち合い」の実践を強調する。

結果として、1テモテ・2テモテのこれらの箇所も、「**世的な欲望や富への執着を捨てて神を第一とする**」という新約聖書全体のメッセージを受け継いでいるといえます。特にテモテの指導者的立場を考慮すると、パウロは彼に“教会内外の信徒たち”へこのメッセージをしっかりと伝えるよう強く促した、という文脈も合わせて理解するとよいでしょう。

## ほかに手紙の中で参照すべき箇所はありますか？

---

### OpenAI o1

---

以下では、新約聖書の書簡（手紙）の中で、「**富に対する態度**」「**世的な欲望と悔い改め**」といった主題に関連して、あわせて参照すると良いと考えられる主要な箇所をご紹介します。すでに挙げたヤコブ書やテモテ書だけでなく、パウロ書簡や一般書簡（ペトロやヨハネの手紙）など、全体を通して同じテーマが繰り返されていることに気づくでしょう。

## 1. パウロ書簡

---

### 1-1. 2コリント8-9章

- **主題：喜んで与えること・十分な備えをすること**
- パウロは、エルサレム教会への献金を勧める中で、「与えることは神の恵みに応答する行為」とであると説きます。
- 「十分に与えることは、富の有無を問わず、互いの必要を満たすため」(8:14)という聖徒の交わり（コイノニア）の大切な実践。

### 1-2. コロサイ3:5

- 「**むさぼりは偶像礼拝である**」
- 金銭欲やむさぼりを「偶像礼拝」と呼び、神よりも金銭や欲望を上置くことの危険を簡潔に指摘しています。

### 1-3. エフェソ4:28

- **盗む者は盗みをやめ、労苦して働き、困っている人に施せ**
- 富を得る手段の正しさと、他者への配慮・施しがセットで教えられています。

- 単に「盗んではいけない」ではなく、「自分の手で働き、人に与えるために用いる」という積極的な姿勢。

---

## 2. 一般書簡

### 2-1. ヤコブ1:9-11

- ヤコブ書はすでに多く引用されていますが、1:9-11でも「低い身分の兄弟は高くされることを喜び、富んでいる者は低くされることを喜び」と語られ、「富は花のように消え去る」と強調。
- 命のはかなさと、神の視点で見るときに富に頼るむなしさが強調されます。

### 2-2. 1ペトロ2:11-12

- 直接「富」の話ではありませんが、「地上を旅する者」として世から離れた姿勢を持ち、異邦人の間で良い行いを示すように勧められています。
- 世的な欲望（肉の欲）から離れて歩むことが、証しとなるという文脈。

### 2-3. 1ヨハネ2:15-17

- 「世を愛してはならない」
- 世の欲、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢は父（神）から出たものではない、と断言。
- ここでもヤコブ4章や1テモテ6章と同じく、神よりも世を愛してしまう問題が提示されます。

### 2-4. 1ヨハネ3:16-18

- 「兄弟が困っているのに、いのちに必要なものを与えないなら、神の愛はとどまっていない」
- 富を含む自分の資源を他者のために用いないのは、愛が欠けている証拠とされます。
- ルカ福音書16章（ラザロ）などとの関連を示す好例。

---

## 3. テーマ別のまとめ

### 1. 富を「正しく用いる責任」

- 2コリント8-9章や1テモテ6章に顕著。
- 富があること自体は悪ではなく、「自分の欲のためだけに使うか、他者への愛のために使うか」が問われる。

### 2. 「むさぼり」や「世の欲望」は偶像礼拝につながる

- コロサイ3:5, エフェソ4:28, 1ヨハネ2:15-17など。
- 神ではなく富や欲望に心を明け渡してしまう態度を、新約聖書は一貫して厳しく警戒。

### 3. 神への信頼とへりくだりの重要性

- 1テモテ6:17-19で「不確かな富ではなく神に望みを置け」という勧め。
- ヤコブ4章の「神に近づき、世を愛する姿勢を捨てよ」との並行。

#### 4. 他者への具体的な愛・施しを通して、真の信仰が証明される

- 1ヨハネ3:16-18、ヤコブ2章の「行いのない信仰は死んでいる」。
- この流れはルカ15-19章の「失われた者を救う」「富を分かち合うザアカイの姿」などとも強く呼応します。

## 4. 総括

- 新約聖書の書簡全般を通して、「富や世の欲に心を奪われることが、神との正しい関係を損なう」という警鐘が繰り返し鳴らされています。
- 同時に、「富や資源を持つこと」は神の賜物でもあり、それを隣人愛・教会の交わりのために用いるよう促される例（2コリント8-9章、1テモテ6:17-19など）も多いです。
- ヤコブ書、ペトロ・ヨハネの手紙、パウロ書簡と幅広く確認すると、「主に対する悔い改めと信仰」が必ず「世への態度」「富の扱い」の具体的な行動に反映される ことがよく分かるでしょう。

これらの箇所をあわせて読むことで、ルカ福音書15-19章やヤコブ書4-5章、パウロがテモテに宛てた「信仰の戦い」についての勧めが、新約全体の一貫したメッセージであることを一層深く理解できるはずです。

## AABB 教えを、行うことと聞くこと

- 段落1と段落2は、隣人愛（兄弟愛、友愛）を行うこと

### 1. 悔い改めた兄弟を受け入れる（受け入れない兄に対して）

### 2. 困っている者の負債を赦し助ける（受け入れられて弟子に対して）

- 段落3と段落4は、隣人愛の教え（律法と預言者）を聞き従うこと

### 3. 律法と預言者は、世の欲に惑わさるなと教えている

### 4. 律法と預言者（レビ記）には、罪が赦され汚れがきよめられるが書かれ、神様は何度も何度も（レビ記には7が多い）赦してくださったことを感謝せよ（ユダヤ人は聞いていない）

## OpenAI o1

以下では、「AABB」構造として整理されたルカ15:1-17:19の読み方を、主に「行う（実践する）」「聞く（律法と預言者を学び従う）」という観点から概観します。特に「隣人愛（兄弟愛、友愛）」を軸として、前半が“行う”こと、後半が“聞き従う”ことを強調しているという見取り図です。加えて、「悔い改めた兄弟を受け入れる」「困っている者の負債を赦す」という具体的な行動と、「律法と預言者が教える隣人愛」「レビ記に記された罪の赦しや汚れの清めへの感謝」という学びが、AABBの並行構造の中に置かれています。

注：以下の内容では、聖書の中で「らい病」と訳されている箇所を「ツアラアト」あるいは「ツアラアトの人」と表記します。

# 1. AABB 概要

---

- **Aパート（段落1と段落2）**
  - テーマ：隣人愛（兄弟愛）を「行う」こと
  - (1) 悔い改めた兄弟を受け入れる
  - (2) 困っている者の負債を赦し助ける
- **Bパート（段落3と段落4）**
  - テーマ：隣人愛（兄弟愛）の教え（律法と預言者）を「聞き従う」こと
  - (3) 律法と預言者は、世の欲に惑わされないようにと教えている
  - (4) 律法と預言者（レビ記）では、罪が赦され汚れがきよめられる恵みが何度も示されており、それを感謝して生きるように（ユダヤ人は真に聞き従っていなかった）

こうした区分を見ると、前半（A）は「実践（行動）」、後半（B）は「聞いて従う（学び・信仰姿勢）」という対比が立ち上がります。同じ隣人愛・神の赦しのテーマでも、「行為」と「学び（聞く）」の両面がそろって完成する、というメッセージが浮かび上がります。

---

## 2. Aパート：隣人愛を「行う」

---

### (1) 段落1（15:1-15:32）

- **主題：悔い改めた兄弟を受け入れる**
- 放蕩息子のたとえでは、悔い改めて戻ってきた弟息子を父が喜んで受け入れる一方で、兄息子が素直に受け入れられない姿が強調されています（15:25-32）。
- ここには「悔い改めた者を受け入れ、共に喜ぶ」行動こそが真の隣人愛・兄弟愛であるという示唆があります。実際に行動を起こして“家に招き、宴会を開いて迎える”父の姿と、受け入れようとしぬ兄との対比が物語の焦点です。

### (2) 段落2（16:1-16:13）

- **主題：負債を赦し、助ける**
  - 「不正な管理人（執事）」のたとえで、不正な管理人は主人から解雇されそうになり、借金の帳消し（または軽減）をして“友”を作ります（16:5-9）。イエスはこれを無条件に称賛しているわけではありませんが、“自分だけの利益ではなく負債を減らして他者を助ける”行為の面に注目し、「不義の富であっても隣人と分かち合うために使えばよい」という教えを引き出しています。
  - ここでも“助け・赦し”という具体的行動が問題となっており、「隣人（兄弟）を現実的に助ける」ことが前半の主要テーマとして示されています。
- 

## 3. Bパート：隣人愛（律法と預言者）を「聞き従う」

---

### (3) 段落3（16:14-16:31）

- **主題：律法と預言者は「世の欲に惑わされるな」と教えている**



- 「金持ちとラザロ」のたとえを通して、富を好むファリサイ人への警告が展開されます。イエスは「モーセと預言者（＝旧約全体）に耳を傾けない者は、たとえ誰かが死人の中からよみがえっても悔い改めない」と語ります（16:31）。
- 旧約の律法・預言者（特に貧しい者への配慮や“欲望に惑わされるな”という教え）に真摯に聞き従うなら、金持ちはラザロを顧みたはず。しかし実際には聞き従わず、あわれみを示さなかったがゆえに裁かれます。
- ここでは“隣人愛”を「聞き従わない」者の例として金持ちが登場し、「世の欲」に負ける姿を戒める段落となっています。

#### (4) 段落4 (17:1-17:19)

- **主題：レビ記などの律法・預言者に示された罪の赦しと汚れの清めを感謝して受け取る**
- 17章は弟子たちへの教え（17:1-10）に続き、ツアラアトの人十人が登場します（17:11-19）。ツアラアトの人たちは「清め」を必要とし、イエスによって清められます。レビ記にもあるように、ツアラアトからの清めや罪の赦しは、祭司の検査や儀式を通じて繰り返し示されていました（レビ記13-14章など、特に7日間×複数回など“7”が頻出）。
- しかしこのルカ17章のエピソードでは、十人のうちひとり（しかもサマリヤ人だけ）がイエスのもとに戻って感謝を示し、神をあがめました（17:15-16）。
- ここには「神様は何度も繰り返し赦し清めてくださる」ことへの感謝を持つかどうか問われており、レビ記の教えを「本当に聞いているのは誰か」が焦点に据えられます。ユダヤ人たちは形式的に律法を知っているはずでも、実際に神の恵みを認め感謝したのは“サマリヤ人”であった、という皮肉な対比です。

## 4. 「行う」と「聞く」の両面で完成する隣人愛

このように「AABB」という配列で見ると、

- **A (1・2)**
  - “悔い改めた兄弟を受け入れる”
  - “負債を赦し、困っている者を助ける”
  - → **隣人愛を具体的にを行う** こと
- **B (3・4)**
  - “律法と預言者を聞き従い、世の欲に惑わされない”
  - “レビ記などが示す赦しと清めを何度も与えてくださる神に感謝する”
  - → **隣人愛の教えを聞き従う** こと

という二つの軸がはっきり浮かび上がります。隣人愛や悔い改めを「**行動面（行う）**」と「**信仰面（聞き従う）**」の両方から説いている、と捉えられるわけです。

1. **Aパート**で語られる“行動”は、具体的に兄弟を受け入れたり、負債を赦したりする“愛の実践”。
2. **Bパート**で強調される“聞き従う”は、旧約（律法と預言者）の教えを学び、本当に神の心を知ること。またレビ記の規定や儀式が象徴する“赦しと清め”を深く理解し、感謝をもって応答する“信仰姿勢”です。

両者が組み合わさってこそ、ルカ福音書15～17章が描きたい「悔い改めと隣人愛」の全体像が見えてきます。行動がなければ絵に描いた餅になり、学びがなければ自己流の思い込みに陥るかもしれない。**行うこと（実践）と聞くこと（学び・信仰）の両輪**が大切だというメッセージが、このAABB構造を通して立体的に示されていると言えるでしょう。

## まとめ

- **A (15:1-15:32, 16:1-13)** で隣人愛を行動として実践する姿（兄弟を受け入れる・負債を赦す）が提示され、
- **B (16:14-31, 17:1-19)** で隣人愛の教え（律法と預言者）を聞き従うよう強調されます（世の欲に惑わされない・レビ記の赦しと清めを感謝して受ける）。
- この二つを合わせて読むと、「悔い改めた者を喜んで受け入れる（行動）」「律法・預言者の教えを真に聞いて神に感謝する（信仰）」という、「**行う**」と「**聞く**」が表裏一体となった聖書的隣人愛が提示されているのです。

特に後半では、ツアラアトの人が清められた出来事を通じて、レビ記に書かれた“汚れを清める”儀式と神の繰り返しの赦しへと目を向けさせ、実はそれをいちばん喜び感謝したのはサマリア人であった、というストーリーが印象的です。ここに「聞いていても従わない」ユダヤ人 vs. 「真に聞いた」サマリア人の対比があり、聖書の読者にも「**あなたは本当に聞き従っていますか？**」という問いかけが突きつけられます。

このようにAABB構造を踏まえて読むことで、ルカ15-17章のメッセージが「隣人愛はまず行うべき具体的な行為であり、同時に神が律法と預言者を通じて何度も示してこられた赦しの教えを本当に聞く姿勢でもある」という両面を強調するものとして理解できるでしょう。

## 分数・倍数が頻出するのも、ルカ福音書15章1節から17章19節がひとつの段落であることを表しています。

100匹の羊のうち1 10枚の銀貨のうち1 2人の兄弟のうち1 100バテのうち50 100コルのうち80 神か富か（2つのうち1つ） 5人の兄弟のうち1 7度（7倍） 赦す 10人のうち1人だけ

## OpenAI o1

以下では、「ルカ15:1-17:19がひとつの段落を成している」という視点を裏付ける要素として、「分数・倍数」のモチーフが頻出している点を整理しつつ、その意味を考えてみます。これらの数値が連なることによって、物語やたとえ話が互いに響き合い、全体として一体感を持った文学構造を生み出していると見ることができます。

## 1. 分数・倍数が登場する箇所一覧

1. 100匹の羊のうち1匹が迷い出る（15:4-7）
2. 10枚の銀貨のうち1枚を失う（15:8-10）
3. 2人の兄弟のうち1人が家を飛び出して浪費する（15:11-32）
4. 100バテの負債を50に減らす（16:5-6 不正な管理人のたとえ）

5. 100コルの負債を80に減らす (16:7 不正な管理人のたとえ)
6. 神か富か (二つのうち一つを選ぶ) (16:13)
7. 5人の兄弟のうち1人も悔い改めるかどうか (16:28-30 金持ちとラザロ)
8. 7度 (7倍) 赦す (17:4)
9. 10人のツアラアトの人のうち1人だけが感謝する (17:11-19)

こうして見てみると、「100」「10」「2」「7」「5」など、大小さまざまな数が登場し、しかもその多くが“ある集団のうち1つ (あるいは1人)”のように分数的な形をとったり、何倍にも赦す (7倍など) といった倍数的な形をとったりしているのが特徴的です。

---

## 2. 分数・倍数に込められた意味・効果

---

### 2-1. “ひとり”に対する焦点

- 100匹に対して1匹、10枚に対して1枚、2人の兄弟のうち1人等、集団のうちの“少数”に焦点が当たる形になっています。
- これは「失われた羊・銀貨・息子」のように、“少数”が失われ、また見いだされるドラマの強調でもあり、ルカ福音書の「失われた者への神の愛」というテーマを印象づけます。

### 2-2. “赦し”や“恵み”の強調

- 「不正な管理人」で負債を減らすときも、単に「いくらか」ではなく「100バテを50に」「100コルを80に」と具体的な数値が示されます。分数 (あるいは割合) で表されると、負債軽減の行為が際立ちます。
- さらに「7度 (7倍) 赦す」という数字は、旧約のレビ記やダニエル書などで「7」が象徴的数値として繰り返されるように、聖書的世界観で“完全”や“繰り返しの強調”を表す数として用いられています。

### 2-3. “二者択一”の決断

- 「神か富か」 (16:13) のように、2つのうち1つだけを選ばなければならないという表現は、分数ほど細かい比率ではないものの、「どちらかを選ぶ」という緊張感を呼び起こします。
- 金持ちとラザロ (16:19-31) では、「5人の兄弟がいる」と言いつつ、彼らが悔い改めるかどうかは分からない。ここにも集団のうち“1人がどうするか”という問いが含まれ、結果が左右される決断が強調されます。

### 2-4. “一体感”の形成

- これらの数字がばらばらに出てくるというよりも、15-17章前半に集中して現れることで、一続きの流れとしての“統一感”を生み出していると考えられます。
  - それぞれのたとえは異なるテーマを扱っているようでいて、「どれだけの割合が失われるか」「どの程度赦すか」といった数字が繰り返し登場することで、失われた者・赦し・悔い改め・富の扱いというキーワードをまとめ上げる効果を持っています。
-

## 3. 15:1-17:19がひとつの段落であることを示す文学的効果

---

### 3-1. 繰り返しによるまとめ

- 聖書の文学構造では、言葉の繰り返しやテーマの繰り返し、段落やセクションを構成する際の典型的な手法となっています。
- この箇所では「失われたもの」「悔い改め」「赦し」と並んで、「分数や倍数による対比・強調」という繰り返し要素が目立ち、そのことが15章から17章前半までを一気通貫するストーリーとして見せているわけです。

### 3-2. 一連の「誰かが何かを失い、それをどう扱うか」の問題

- 「100匹のうち1匹」「10枚のうち1枚」では、失われたものを熱心に探して喜び、受け入れます。
- 「2人のうち1人」（放蕩息子）も同様に、失われた者が戻って来たときに大いに喜ぶべきなのに、兄のほうは受け入れない。
- 「100バテのうち50、100コルのうち80」では、減らしてあげる行為（負債を赦す）が焦点です。
- そして「10人のツアラアトの人のうち1人」が感謝を示す（17:15-16）という同様の分数表現によって、全体がいわば“1を見いだす／どのように扱うか”を問い続ける流れになっています。

### 3-3. “ひとりひとり”への問い

- 数的構造が強調されることで、「大勢の中の1人をどのように扱うか」「自分自身はその1人としてどう応答するか」という問いが読者に投げかけられます。
- 15章の冒頭では取税人や罪人を食事に招くイエスを批判するファリサイ人たちがいましたが、実はその批判者たちこそ「失われた者」の一人かもしれない、という逆説が見えてきます。
- こうした読者への問いかけが、15:1-17:19を通して継続し、最後に「あなたはその“1”として悔い改め、感謝を示しているのか」という結論へ導く構造と読むことができます。

---

## 4. まとめ

1. 分数や倍数（100のうち1、10のうち1、2人のうち1など）の繰り返しは、
  - 「失われた者」「悔い改め」「赦し」「どれくらい施すか」などルカ15-17章前半の重要テーマを際立たせる。
2. 同じような数字表現が集中的に用いられていることで、
  - 15章から17章前半を一続きのまとめとして理解する手がかりになる。
3. “少数”や“一人”への焦点が、
  - 失われた者を見つける喜び、悔い改めを受け入れる大きな愛、他者の負債や汚れを赦す神の憐れみを表し、
  - さらに「あなたはその1人として応答するのか」という読者への呼びかけの形をとっている。
4. 倍数（7倍、2つのうち1つを選ぶ）という対比も含め、

- 「赦し」「神か富かの選択」「どれだけ他者を受け入れるか」などで、**緊張感ある選択や大胆な行動**を促す要素となっている。

こうした数のモチーフを追うと、確かにルカ福音書15:1-17:19の各エピソードが互いに有機的に絡み合い、「失われたものを探し出す」「負債を赦す」「律法と預言者の教えを本当に聞く」などの主題が繰り返し示されていることに気づきます。

結果として、「数値（分数・倍数）の多用」は15～17章を**ひとつの大きな流れ**として読むよう読者を導く、文学的な工夫・演出になっているのです。